

聖語藏本『成唯識論』卷四と慈恩大師

米田雄介

はじめに

聖語藏本『成唯識論』卷四が平成十三年度の正倉院展に出陳され、多くの人々の関心を呼んだのはまだ記憶に新しいところであろう。従来、聖語藏経巻については、一部の専門家には興味があっても、一般の鑑賞者の関心を惹くことは少なかった。ところがその経巻の書写者が中国・唐の玄奘三蔵の弟子窺基（基）、我が国でも崇敬されている慈恩大師であるとの新説が提示されたことから、久しぶりに聖語藏経巻に衆目が集まったのである。その後、その『成唯識論』卷四の書写者について、いくつかの疑問が提示され、現在では新説はほぼ否定されたのではないかと思うが、新説の提示が大々的に行われたこともあって、いまなお本経巻の書写者が慈恩大師ではないかと考えている方も居られるようである。

かつて、私自身、本誌二十三号に「聖語藏経巻と玄奘三蔵」と題する一文を草し、聖語藏本『成唯識論』卷四は、玄奘三蔵のもとに留学していた

道照和尚が帰国に際し、師玄奘より贈られたものとの考えを、若干の証拠を提示して記しておいた。そのこともあって本経論が展覧会に出陳され、新説が提示されると、一部マスコミ関係者から意見を求められ、それなりに対応してきた。しかし紙面の都合などもあるが、十分に意見を述べることが出来なかったが、その後、いくつか気付いたところもあり、先の論考を補訂しなくてはならないと感ずるところもあるので、改めて聖語藏本『成唯識論』卷四をめぐる問題を取り上げてみたい。

一、問題の所在について

玄奘三蔵に師事していた入唐学問僧道照和尚が帰国に際し、翻経されて間もない『成唯識論』を玄奘三蔵から贈られた。そのことは正倉院の聖語藏に伝わる『成唯識論』卷四の巻末紙背の墨書から問題ないと考えられるが、そもそも本巻に注目したのは、玄奘三蔵が『成唯識論』をいつサンスクリット語から漢文に翻訳したのかを検討することであった。

玄奘三蔵の事績のうち、經典の翻訳は『開元釈教録』や『大慈恩寺三蔵法師伝』などによって明らかになる。^①それによると、玄奘三蔵の翻經は貞觀十九年(六四五)五月から麟德元年(六六四)正月にかけてのほぼ二十年に及ぶ大事業であるが、この間に翻經された七五部一三三五卷の經卷のほとんどは、翻經の開始から終了までの年月日を明らかにすることが出来る。^②

たとえば玄奘三蔵が顕慶五年(六六〇)元旦から龍朔三年(六六三)十月二十日の三年十ヶ月をかけて『大般若波羅蜜多經』全六百卷の翻經を行ったことが分かる。しかし『開元釈教録』などによると、『成唯識論』の翻經時期は「顕慶四年閏十月」とあるだけで、全十卷の各卷の翻經作業の開始時期や終了時期は明確ではなかった。ところが聖語藏本『成唯識論』巻四の卷末紙背に「顕慶四年閏十月廿七日」とあることから、巻四の翻經がその時に終了したのではないかと考えた。また本巻は入唐留学僧道照が玄奘三蔵から与えられて持ち帰ってきたものと想定した。概ねその推測は認められるようであるが、問題は、道照の持ち帰った『成唯識論』がそもそもどの段階のものか、つまり翻經の最終稿なのか、翻經途中のものか、翻經はほぼ完成しているが清書にまで至っていないのではないかなど、いろいろな問題が考えられるが、前稿においては明確に結論付けるに至らなかった。ところが『開元釈教録』によると、「はじめに」で述べたように、本經の筆受(玄奘三蔵の翻經を聞いて書写する役)を務めたのが基、正しくは窺基であり、『宋高僧伝』に記す窺基の伝記によると、彼が単独で筆受の役を務めたところから、聖語藏本『成唯識論』巻四は窺基の筆になるとの説が奈良国立博物館の研究者から提示された。^③

窺基とは、玄奘三蔵の愛弟子で、法相宗の第一代慈恩大師と呼ばれ、法相宗関係寺院はもとより、仏教界全般においても大変に崇敬されている。

しかし窺基の筆になるものは現存していないことから、この度の『成唯識論』が窺基の書写したものであるとすると世紀の発見になる。法相宗関係寺院やマスコミ関係者が注目したのは当然であるが、本当にそうかどうかの検証が進められていく中で、いくつかの疑問が浮き上がってきた。^④

たとえば聖語藏本『成唯識論』巻四には、かなりの数の誤字・脱字があつて(詳しくは後述)、それらを見ていると、到底、法相宗第一代の慈恩大師のものとは考えられないというものである。

確かにいくつもの誤りがあるが、マスコミに取り上げられた聖語藏本『成唯識論』巻四の誤字・脱字の調査は、展覧会目録に掲載の写真と、展覧会場に展示されたごく一部に限られており、全体的な調査に至っていないことから、誤字・脱字といってもどの程度のものか、量的な確認が出来ないままに議論が先行してしまったように思われる。そこで出来るだけ全体がどうなっているのかを考えながら整理してみたい。

正倉院所蔵の聖語藏經巻はほぼ五千巻を数えるが、現在、正倉院事務所では、隋・唐經を皮切りに順次、CD-ROM版で公刊事業を進めている。^⑤その完成はまだ視界には入ってこないが、当面の『成唯識論』巻四は唐經であることから、第一期の公刊分に含まれ、CD-ROMを操作すれば、誰でも見ることが出来る。

したがってまずCD-ROM版に基づく分析の結果を踏まえ、改めて聖語藏本『成唯識論』巻四の筆者が特定できるのかどうか検討してみたいと

思っている。

検討に当たっては、後述するが、聖語藏本が書写されたのに比較的近い時期に写された石山寺所蔵の『成唯識論』と昭和十五年に刊行された佐伯定胤校訂『新導成唯識論』を参照した。

二、玄奘三蔵による『成唯識論』の翻経時期

前稿において、玄奘三蔵が天竺から持ち帰ったサンスクリット語の『成唯識論』を漢語に翻経した時期について、聖語藏に伝わる同経巻四の巻末紙背の墨書「顕慶四年潤十月廿七日」に基づき、顕慶四年潤十月から十二月ごろと想定した。その後、『成唯識論』巻四はもとより、全十巻の翻経完成時期を考える上で、二つの文献に触れなかったため、そのことから紹介しておきたい。

一つは石山寺所蔵『成唯識論』（以下、石山寺本と略す）である。^⑥石山寺本は折本で、全十冊、各冊一卷からなっている。ところで全十巻のうち、巻一を除く九巻のいずれの巻末にも

護法等菩薩之法稽首

顕慶四年十二月二日於玉華肅誠

殿三蔵法師玄奘奉 詔記

翻経沙門基筆受

と訳経記があり、これによると、玄奘三蔵による『成唯識論』全十巻の翻経（サンスクリット語から漢語への翻訳）が終了したのは顕慶四年十二月

二日と考えられる。

またそれらの各巻の訳経記の後に、

天平廿年右京薬師之寺僧惠勝書矣

と記されている。この識語について、たとえば巻五には本紙に直接記され、巻四では貼紙に書かれている相違はあるが、各巻の書体に違いはなく、識語から考えても、本経を天平時代のものと考えて特に問題はない。それだけに石山寺本の基になったものは、八世紀の前半に我が国に伝えられており、石山寺本はその伝来本を書写したもので、詳しくは後に追々と明らかにするが、極めて良質の本である。

もう一つは、佐伯定胤校訂『新導成唯識論』（以下、佐伯校訂本と略す）の記述である。^⑦

『成唯識論』については、古くからさまざまな研究があり、版本の刊行諸本の校訂が行われてきたが、昭和十年代の前期に、法隆寺貫首佐伯定胤は従来の版本の校正が杜撰であることを嘆き、編纂長に佐伯良謙を据え、田村至道、生桑完明、西川龍山、富貴原章信らの碩学を招集して校訂本の出版を企画、昭和十五年五月に念願の校訂本を完成させ、性相学聖典刊行会の名において公刊された。書名は奈良時代の写本にすでに導注が加えられているが、その後も写本や版本に導注があることに因み、佐伯定胤は書名を『新導成唯識論』と命名して刊行されたのである。今日においても『成唯識論』の校訂本としてはもっとも信頼に足るものといわれている。

佐伯校訂本によると、巻一以下、巻十の奥に各巻の完成時期を示す次の記述がある。

第一卷 顕慶四年閏十月二十七日於玉華肅誠殿三藏法師玄奘奉 詔訳
 第二卷 顕慶四年十一月 四日於玉華肅誠殿三藏法師玄奘奉 詔訳
 第三卷 顕慶四年十一月 十一日於玉華肅誠殿三藏法師玄奘奉 詔訳
 第四卷 顕慶四年十一月 十八日於玉華肅誠殿三藏法師玄奘奉 詔訳
 第五卷 顕慶四年十一月二十五日於玉華肅誠殿三藏法師玄奘奉 詔訳
 第六卷 顕慶四年十二月 二日於玉華肅誠殿三藏法師玄奘奉 詔訳
 第七卷 顕慶四年十二月 九日於玉華肅誠殿三藏法師玄奘奉 詔訳
 第八卷 顕慶四年十二月 十六日於玉華肅誠殿三藏法師玄奘奉 詔訳
 第九卷 顕慶四年十二月二十三日於玉華肅誠殿三藏法師玄奘奉 詔訳
 第十卷 顕慶四年十二月 三十日於玉華肅誠殿三藏法師玄奘奉 詔訳
 以上、聖語藏本、石山寺本、佐伯校訂本の三本に『成唯識論』の成立時期を窺わせる記述があるが、その内容はそれぞれに微妙に異なっている。

まず聖語藏本は巻四の一巻しか伝わらないが、同巻四の巻末紙背に見える「顕慶四年潤十月廿七日」に注目し、前稿において、その年月日は巻四の翻訳が終了した時期を示すと考えた。ところが石山寺本によると、巻一を除く各巻奥書に「顕慶四年十二月二日云々」と同じ文言が記されているから、石山寺本のそれは、各巻別の翻訳終了時期ではなく『成唯識論』のすべての翻訳が終了した時期を示すと考えられる。そのように考えると、聖語藏本の巻四巻末紙背に見える「顕慶四年潤十月廿七日」は巻四のみの翻訳終了の時期と考えられるから、巻三までの翻訳はすでに終了しており、巻五以降の翻訳はこの後も順次進められ、「顕慶四年十二月二日」に全十巻の翻訳が終了したことになる。その点では聖語藏本と石山寺本との間には

特に矛盾がないように見える。

しかし上記二本と佐伯校訂本を対比すると、『成唯識論』の翻経完成時期はかならずしも一致しておらず、したがって三者の関係をどのように見たらよいのかという新たな問題が生じてくる。

たとえば佐伯校訂本は第一巻の翻経終了を「顕慶四年閏十月二十七日」とするが、この日付は聖語藏本巻四の翻訳終了の日付に一致する。巻一と巻四の翻経が同じ日に終了したということはあり得ないことではないが、佐伯校訂本によると、巻四の翻経の終了は顕慶四年十一月十八日とするから、月日の違いは、どちらかに誤りがあるか、あるいは翻訳が終了したというものの、実際には終了という言葉の内容に相違があるのかのいずれかであろう。このことを考えてゆくためには、經典の翻訳の過程を具体的に明らかにしなくてはならないから、改めて後に取り上げたい。

同じことが石山寺本と佐伯校訂本との関係でも見られる。石山寺本によると、顕慶四年十二月二日までにすべての翻訳が終了していることになるが、佐伯校訂本によると、翻経の終了はその年の暮れ、十二月三十日である。このような日付の相違について、佐伯校訂本は第六巻の奥書の頭書に、石山寺本の第二、第三、第四、第五、第七、第八、第九、第十の各巻の奥に「顕慶四年十二月二日云々」とあり、その年月日は、実は第六巻の訳日に当たるかと記している。しかし、もしそういうことであれば、石山寺本の巻七以下の経巻に巻六の訳日を記している理由の説明が付かないが、これもまた聖語藏本と同じく、ある段階での終了を示していると考えることが出来るのではあるまいか。

なお佐伯校訂本によると、第十巻の完成年月日が顕慶四年十二月三十日
で、『開元釈教録』によると、その翌日から『大般若波羅蜜多經』六百巻の
翻經が開始されているから、『成唯識論』の訳経は顕慶四年十二月三十日に
すべてが完了したと考えることが出来る。

『開元釈教録』によると、顕慶四年七月二十七日から九月十四日につ
けて『阿毘達磨法蘊足論』十二巻の翻經が行われ、引き続き『成唯識論』
の翻經が開始されている。厳密には『成唯識論』の翻經開始日は確認でき
ないが、『開元釈教録』によると、顕慶四年閏十月であるから、その月の初
めには翻經作業が開始されていたのであろう。

以上の経緯を踏まえると、顕慶四年閏十月はじめに開始された翻經は、
その月の二十七日に巻四までを終え、同年十二月二日に巻十までの翻經が
終了したと考えられる。しかし經典として完成するためには、さらに調整
の必要がある。たとえば翻經が完全であるか、文字に誤りはないか、字配
りはキチンとなっているかなどの最終的なチェックを経て、清書され、よ
うやく経巻として完成する。そうだとすれば、石山寺本にみえる『成唯識
論』の終了時期を十二月二日とするのに対し、佐伯校訂本が十二月三十日
とするのは、訳経作業の段階の違いと考えられよう。

前稿で取り上げたように、玄奘三蔵の訳経組織は、証義、筆受、正字（字
学）、証文（綴文）、証梵語梵文（証梵文、証梵語）などの任務を帯びた人
たちが、それぞれの役割を分担している。まず証義は、翻經に当たって適
切な言葉であるかどうかを判定する。筆受はその翻經された言葉を記録す
る。正字は漢字が的確に用いられているか、証文（綴文）は訳文に統一性

を与え、格調高い文章に調える。証梵語梵文（証梵文、証梵語）は梵語が
正しく解釈されているかをチェックする。実際には、これらの役割の人が
完全な分業体制ではなく、それぞれに何役もこなしているようで、慈恩大
師である窺基が筆受の役を務め、しかも玄奘三蔵の指揮に従ってひとりで
翻經作業に従事することは不可能ではなかったのである。

ただ指摘されているように、当時、一巻の經典を翻經するのに、ほぼ七
日前後の日数が必要としていたという⁽⁸⁾。しかしそれは複数の協力者を得て
行われた時のもので、筆受一人による場合には、翻經そのものは七日近く
の日数で一応完成したとしても、文章を整え、誤字・脱字がないかどうか
などの確認にはさらに多くの日数が必要とするのではなからうか。そのこ
とを念頭に、あらかじめ石山寺本に記す翻經の完成年次と、佐伯校訂
本による本經の各巻の完成段階を調査すると、石山寺本にいう「顕慶四年
十二月二日」は、三蔵法師による翻經の全体の翻經が終了した時期を示し
ているが、それで経巻が最終的に完成したのではなく、経巻全体の点検整
備、つまり誤字・脱字、あるいは一行の字数などの調整を行い、清書して
事実上の完了となったのであろう。

佐伯校訂本に、第十巻の完了日時を「顕慶四年十二月三十日」としてい
るのは、最終的な調整、つまり清書の終了した時を示しており、その翌日
の顕慶五年正月一日から、『大般若波羅蜜多經』六百巻の翻經に着手してい
る。

以上のように考えると、石山寺本にいう「顕慶四年十二月二日」は、三
蔵法師による翻經の全体が取りあえず終了した日付であろう。しかし佐伯

校訂本では、その日に、第六巻が完了したと記している。恐らくその日は、先に取りあえず翻訳が終了していた巻六について誤字・脱字あるいは字配りなどの調整がなされ、そして清書が最終的に完了したのであろう。

このことを踏まえると、聖語蔵本『成唯識論』巻四の巻末紙背に見える「顕慶四年潤十月廿七日」は、この日に取りあえず巻四の翻訳が終了したが、まだ調整が完了していなかったのであろう。佐伯校訂本によると、『成唯識論』巻四は「顕慶四年十一月十八日」に完了したとある。おそらくこの日に巻四の調整、清書が最終的に完了したのであろう。

三、聖語蔵本『成唯識論』の用字について

『成唯識論』の翻経の過程を検討する前に、聖語蔵本と石山寺本および佐伯校訂本の用字法を見ておきたい。まず石山寺本は奈良時代に書写されたもので、古くかつ由緒正しいものと思われる。また佐伯校訂本は諸本をもとに校訂したもので、聖語蔵本をはじめ、石山寺本、その他、写本、版本あわせて十本ばかりを基に校合している。現段階ではもともと信頼できる校訂本といえよう。したがって聖語蔵本の用字法は石山寺本と佐伯校訂本の用字法を参考に検討することにしよう。

前記のように、聖語蔵本『成唯識論』が慈恩大師の書とする新説に対し、新聞紙上で、その用字法からいくつかの疑問点が指摘されたが、十分な議論が行われてはいない。そこでつぎに聖語蔵本『成唯識論』巻四の用字法について検討しよう。

(1) 異体字について

正倉院展が開催されると、正倉院展の目録に掲載されている写真(本文十四頁に掲出)に基づき、たとえば、文末から十九行前(聖語蔵本『成唯識論』によると、16紙17行目)には「方起貪等諸々煩惱故」となるところが「方起貪等諸々煩惱故」になっているとか、また目録の写真にはないが、展示会場での観察から、最後の行から二十四行前(16紙13行目)に「邪欲」と人間のよくない心の働きを述べたくだりが「耶欲」となっており、これでは経典として意味を為さないなどと指摘され、さらに、これらの文字の誤りから、聖語蔵本『成唯識論』を慈恩大師の書とする新説は認められないというものである。^⑩

しかしここで取り上げられている「慾」や「耶」などは文字の誤りではなく、「悩」「邪」の異体字である。つぎにこれらの例を含め、聖語蔵本および石山寺本に見える異体字、または通用文字を第1表に整理しておこう。マスコミで誤字として取り上げられた「煩惱」は、聖語蔵本4紙23行目の「煩惱」をはじめ、第1表には省略したが、4紙24行目に二ヶ所、26行にも一ヶ所「煩惱」とある。右に該当する箇所を石山寺本についてみても同じく「煩惱」と記している。ところがこれらに該当するところを佐伯本についてみると「煩惱」とある。また聖語蔵本の15紙3行、4行、5行目などには「煩惱」とあり、佐伯校訂本も当該箇所では「煩惱」と記している。しかし石山寺本には「煩惱」とあるから、「煩惱」でも「煩惱」でもいい。わざわざ『類聚名義抄』などを引くまでもなく、手許の異体字関係の辞典などでは「慾」は「悩」の異体字としている。

また新聞で報じられたように、聖語蔵本16紙13行目の「耶欲」とある箇所は石山寺本も同じく「耶欲」とある。もともとだからといって「耶欲」が正しいのではなく、佐伯校訂本には正しく「邪欲」と記している。聖語蔵本でも、その二行後の15行目や20行目(十四頁下段の写真)には「邪欲」と正しく記している。

一方で、おなじ「耶」について、聖語蔵本9紙35行や36行目に見える「阿頼邪」は「阿頼耶」の意味で使っており、ここでも「邪」と「耶」が同じ用いられていることが分かる。

つまり「惚」や「耶」「邪」は「悩」や「邪」「耶」の異体字で、書体の違いであるから、異体字を用いているからといって、それを誤りとはいえない。

このほか新聞報道によると、「1紙11行目の偏勝は偏勝の誤り」と指摘されているが、有賀要延編『難字・異体字典』(国書刊行会)によると、偏は偏の異体字とし、実際に中国の金石文にそのような例があるとのことであるから、偏も偏の異体字で、誤りとは言えない。

異体字の使用には、同じ文字を重ねるのを避ける意味合いもある。たとえば聖語蔵本の5紙2行目の「囧」と同じ行およびその前行や二行後の行には「囧」と記している。

異体字は聖語蔵本に見られるだけではなく、石山寺本にも見ることが出来るし、ここでは一々例示するのは避けるが、奈良時代の経巻に異体字を使っている例は多く、したがって異体字を使っているのは、文字を知らないのではなく、むしろ文字に通じているのではないとも考えられる。

(2) 誤字について

聖語蔵本の中には、明らかに誤字と判断されるものがあり、その数の多さから、いわれるように写経者の教養の程度が疑われているようである。もっとも中には、誤字なのか異体字なのか、点画の一部が脱落しているが許容の範囲内かどうかの判断の難しいものがある。その点を踏まえて現在もっとも信頼の置ける佐伯校訂本を参照しつつ、聖語蔵本の文字の可否を検討すると、実に多くの誤字を指摘することが出来る。少し煩雑になるが、誤字と思われるものを第2表に掲げておこう。なお石山寺本との比較も行ったが、同本に触れていないところは佐伯校訂本と石山寺本が同じであることを意味する。

第2表に挙げたのは誤字の初見のみである。その後も文字で誤っているものが少なくないが、一々取り上げるのは煩わしく省略した。したがってここでは二十五箇所ばかり誤りを指摘しているが、実際にはさらに多くの誤りが存在しているのである。それらの点に留意すると、聖語蔵本『成唯識論』巻四を仏教に造詣の深い慈恩大師が書いたとは考えられないのである。

(3) 脱字について

脱字も少なからず見える。第3表にまとめたように、今ここで脱字と言うのは、聖語蔵本を書写する途中で、恐らく脱落に気付き、字間に付け加えたと考えられるものである。何故なら脱字に気付いて文字を補っている行を見ると、殆どが十六字詰めで、脱字を加えると一行十七字となるから

である。この点については、すでに平成十三年度『正倉院展』目録の「宝物寸描」(前出)で指摘しているが、その通りである。

当時の経巻は一行十七字詰を原則としているから、一文字の脱落に気付くと、脱落した文字を字間に傍書し、十七字詰になるように調整しているのである。石山寺本は見事に十七字詰になっている。

なお聖語蔵本には一字だけではなく、一行分、まるまる脱落していた例もある。12紙12行目と13行目の行間に丁度一行分、すなわち十七字分が細かく挿入されているのがそれで、恐らく書写の直後に気付いたのであろう。

(4) 誤入について

一行十七字であればよいというわけではなく、一行十七字詰で書かれている聖語蔵本であっても、石山寺本と比較すると、第4表のように文字の誤入がある。

たとえば聖語蔵本の3紙36行目は十七字詰で問題がないようであるが、誤って本来ない文字が記されていたようである。本来ない文字とは、聖語蔵本の「三和合有力」とある箇所が石山寺本の当該箇所では「三和有力」とあって、和と力の間に「合」がない。このことから、聖語蔵本は誤って「合」の字を書いたものと考えられる。

(5) 行と字数の調整について

脱字に気づき一行の字数を十六字とし、脱字の位置の傍らに文字を補っている例もあるが、脱字がないのに十六字詰になっている箇所が若干見ら

れる(第5表参照)。ところが石山寺本を見ると、当該箇所は十七字詰めで特に問題はない。そこで改めて聖語蔵本の当該箇所の前後を調査すると、十八字詰になっている例があり、聖語蔵本は二行にわたって字数の調整をしていることが分かる。

脱字という訳ではあるまいが、一行十七字ではなく、一行の字数が十二字とか、十五字しかない例もある。第6表に掲げておいたが、そのようなものの中には、12紙5行目および13紙4行目のように、經典の内容に基づく段落のために改行されたと思われる例もあるが、複数の文字を誤って記したために行の調整をしているところもある。たとえば11紙21行目と22行目については、段落による改行ではなく、その前行に当たる11紙20行目の「作等無間縁是故八識」が重複して誤記されていることに基づく。そこで聖語蔵本の書写者はその九字の誤記に気付き、つぎの二行で調整しようとして少しずつ改行の処置を執ったのであろう。23行目からは十七字詰めになっている。

(6) その他

このほか十八字詰めになっているところがある。第7表を見ると、行末になると、文字が小さくなり、二字のところは三字を、あるいは三字のところは当初予定の字数にもう一字分が加わっていることになる。小さく文字を補っているのは、恐らく一行十七文字で書写している途次に一字分をさらに加えないといけないのに気付き、二～三字分に三～四字を記したための処置と思われる。たとえば10紙32行目および11紙3行目は十八字詰め

になっている。聖語藏本のもとなったものには十七字詰めであったのに（石山寺本の当該箇所は十七字詰、間違って一字分書き加え、聖語藏本は間違っただけ十八字詰となったのであろう。

（1）から（6）までの文字等の誤りをみていると、先にも述べたように、一般の写経生でも間違うはずのないものを間違っており、唯識論を学ぶ僧が書いたとは到底考えられない。したがって聖語藏本『成唯識論』巻四については、慈恩大師の筆とは考えられないといわざるを得ない。

しかし聖語藏本『成唯識論』巻四は確かに慈恩大師の筆とは考えられないが、同巻は玄奘三蔵の翻經になる『成唯識論』の成立過程を示唆する貴重な経巻であると考えている。つぎにその点を整理し、むすびにかえたいと思う。

四、むすびにかえて―聖語藏本『成唯識論』の成立過程―

聖語藏本『成唯識論』が中国・唐で書写され、道照が持ち帰ったことは間違いないが、書写したのは慈恩大師ではなかった。では誰がそれを写したのか。今となつては確認する手だてはない。『成唯識論』が顕慶四年十二月三十日に完了したとき、大雁塔と呼ばれる大慈恩寺の十三重塔に納められたのであろうが、その時、塔に納められたのは慈恩大師が清書したものであるのか。そこに納められた経巻が、その後、どのようなものになったのか分からないが、大雁塔に納められるまでの翻經の過程も単純ではなかった。

三蔵法師のもとで翻經に従事したのはいわれるように慈恩大師であるが、

如何に優秀な大師であっても、玄奘法師の翻經をそのまま文章化したとは考えられない。『成唯識論』以外の経巻の場合、筆受の役の外に、証義、正字、証文、証梵語梵文などの諸役のものがいて、経論の内容のチェックを行っている。したがって如何に勝れた僧侶であっても、部分的には分業を余儀なくされるのである。したがって優秀な僧侶が一人で翻經に関わったとすると、おそらく翻經にあたって、段落ごとか、文節ごとかは不明としても、翻經文についていくつものメモが作られ、それらを順次整理していったのではあるまいか。いま具体的にはメモは残っていないから推論に過ぎるとのお叱りを受けるかも知れないが、翻經した言葉が経論として適切かどうかの検討がなされ、訳文に格調を与え、全体的に統一性を持たせるための作業が段階を追って進められたものと思われる。しかしそこではまだ經典としての内容や文章の整備は行われるが、まだ体裁は整えられていなかったのではあるまいか。内容が確定すると、当時、經典は一行十七字が原則であったから、經典としての体裁が整えられることになる。

第3表によると、文字の脱落があることから十六字詰めとし、行末の一字分を空白とする一方、文字が脱落した箇所に脱落した文字を小さく傍書する。傍書の小字を加えると十七字詰めとなるようにしている。

また第5表によると、1紙13行目を十六字としたため、14行目を十八字詰とし、前行の不足を次行で調整しているなどの処置を加えている。

あるいは第6表によると、11紙21・22行目はそれぞれ六字と二字分の空白があつて、一見するとアトラダムな印象を与えるが、実はその前行にあたる20・21行にかけて九字分の重複があるためである。つまりその九字

分を削除すると、20～22行の3行に併せて34文字が記されていることになり、經典の基準に当てはめると、一行十七字詰めとなるから、一行分減少することになる。

以上のように整理してみると、もともと聖語藏本『成唯識論』の基になった原稿本は十分に発酵しきれていない未完成のものと考えられる。ただ全くの断簡からなるメモ的なものではなく、ある程度は整った形になっていたであろう。そのようなものをさらに一行十七文字に整えるのは、必ずしも仏教に精通していなくても、そこそこ文字を書き慣れている人であれば務まるものと思われる。もしそうだとすると、玄奘三蔵による翻經が筆受の慈恩大師によって書き留められるが、直ちに当時の經典の形である一行十七文字に整えられたとは考えられないから、慈恩大師以外の人物によって經典としての体裁に整えられたのであろう。しかし残念ながら同人は必ずしも仏教に精通していないことから、元の原稿にあった文字を正確に書写することが出来ず、かなりの誤字を生じてしまったのである。しかし石山寺本との対校によると、これまで指摘したように聖語藏本の誤字・脱字、あるいは改行の位置の問題などは石山寺本ではほとんど解決している。そのようなものが清書され、その全てが完成したのが顕慶四年十二月三十日のことであった。その様にして完成したものが後に大雁塔に納められたのであろう。成唯識論が完成して息つく暇もなく玄奘三蔵は、翌日から『大般若波羅蜜多經』六百卷の翻經に着手するのである。

以上のように考えると、聖語藏本は清書本ではなく、文字通り未完成本で、これからさまざまな角度からの検討が加えられて完成品に仕上げてい

ったのであろう。そうだとすると、これまでほとんど明らかにならなかった翻經の手順を教えてくれるものとして本經卷はただ卷四しか伝わっていないが、大変に貴重なものということが出来よう。

注

- (1) 『大正新修大藏經』による。
- (2) 玄奘三蔵による仏典の翻經については、「聖語藏經卷と玄奘三蔵」(『正倉院紀要』二三号)に、「玄奘三蔵の翻經一覽」を作成し掲げておいた。
- (3) 正倉院展の開催に先立つて新聞に報道された。たとえば『朝日新聞』の平成十三年十月十日朝刊によると、『慈恩大師正倉院に「直筆」』との見出しで、聖語藏本『成唯識論』は慈恩大師の真筆であると報じられた。この新説は、その後、講演会などでも紹介されたが、平成十三年度の『正倉院展』目録および巻末に新設された「宝物寸描」においても取り上げられている(西山厚『成唯識論』の遙かな旅)。

- (4) 『産経新聞』平成十三年十一月十日朝刊によると「慈恩大師直筆に疑問」との大見出しで、さらに「研究者指摘」「数カ所に誤字脱字」と小見出しを付して、「仏教に精通する慈恩大師には、ありえないミス」と指摘している。慈恩大師説を唱えた西山氏と同じ奈良国立博物館の松浦正昭氏も慈恩大師説に疑問を呈している。また同紙は同年十二月十四日にも、慈恩大師直筆問題として、「新たに実在しない字も判明」とし、異体字とされる文字についても疑問符を付された説を紹介している。

実は私自身もインタビューを受けたが、その際、問題の經典は慈恩大師の直筆ではなく、草稿のようなものではないかとの考えを述べておいた。

(5) 株式会社丸善から販売されている。

(6) 石山寺所蔵『成唯識論』の調査に当たっては、石山寺当局のご好意を忝なくし、また独立行政法人奈良文化財研究所の綾村宏氏にご配慮戴いた。

(7) 佐伯定胤校訂『新導成唯識論』については、興福寺多川俊英貫首のご教示による。

なお今回参照したのは、昭和四十六年七月に大谷大学仏教学研究室より復刻されたものに基づいている。

(8) 玄奘三蔵の經典の翻經に要する日数は經典の種類や分量によって一定しない。『成唯識論』が平均的な分量なのか、どの程度の難易度の經典か比較出来るものではない。ただ一巻の翻經に要する日数は、七日から十日ぐらいを考えると良いのではあるまいか。

(9) 註(4)『産経新聞』平成十三年十一月十日朝刊参照。

(10) 註(4)『産経新聞』平成十三年十二月十四日朝刊参照。

(宝物調査員・元 正倉院事務所長)

13紙10行目 「非我法妄許為我」は「非我法妄計為我」の誤り。

15行目 「生死淪廻」は「生死輪廻」の誤り。

14紙3行目 「疑无客起」は「疑無容起」の誤り。

7行目 「此文義无亦返」は「此文義無乖返」の誤り。

第3表 脱字一覧

3紙16行目 「何可説滅心」に「彼」が脱落、「説」と「滅」の間に補う。

7紙27行目 「能薰與通」に「種」が脱落、「與」と「通」の間に補う。

8紙23行目 「所変似眼等」とあるが、石山寺本、佐伯校訂本には「眼」と「等」の間に「根」がある。

10紙2行目 「无定不転論説」に「故」が脱落、「転」と「論」の間に補う。

8行目 「相応之若作是説」に「心」が脱落、「之」と「若」の間に補う。

23行目 「眼意二識俱続」に「相」が脱落、「俱」と「続」の間に補う。

14紙14行目 「无所希故」に「望」が脱落、「希」と「故」の間に補う。

16紙4行目 「於境起散故」に「乱」が脱落、「散」と「故」の間に補う。

22行目 「煩惱加別五」に「境」が脱落、「別」と「五」の間に補う。

第4表 誤入の例

3紙36行目 「三和合有力」とあるが、石山寺本、佐伯校訂本には「合」なし。

10紙32行目 「心眼睡眠」とあるが、「心睡眠」の誤り。

11紙3行目 「既爾時必」は「既爾必」の誤り。

第5表 行と字数の調整（1）

1紙13行目は16字、14行目は18字。

7紙26行目は18字、27行目は16字、但し27行目には字間に1字補う。

14紙14行目は16字、15行目は18字、但し14行目には字間に1字補う。

第6表 行と字数の調整（2）

11紙21行目 11字詰で改行、石山寺本、佐伯校訂本は改行なし。

22行目 15字詰で改行、石山寺本、佐伯校訂本は改行なし。

12紙5行目 11字詰で改行、石山寺本、佐伯校訂本も改行。

13紙4行目 12字詰で改行、石山寺本は改行なし、佐伯校訂本は改行。

12紙12・13行目の行間に1行分17字を細字で補う。石山寺本、佐伯校訂本は本文中に正しく記載。

第7表 その他の例

1紙4行目 「於変壊時」を三字分に詰めて書く。行末の「時」は小字。

2紙30行目 「情摂故由」を三字分に詰めて書く。行末の「由」は小字。

8紙18行目 「处处皆」を二文字分に詰めて書く。行末の「皆」は小字。

10紙32行目 「心眼睡眠」とあるが、石山寺本に「眼」はなく17字である。

11紙3行目 「既爾時必」とあるが、石山寺本に「時」はなく17字である。

聖語藏本『成唯識論』卷四の用字法

第1表 異体字一覧

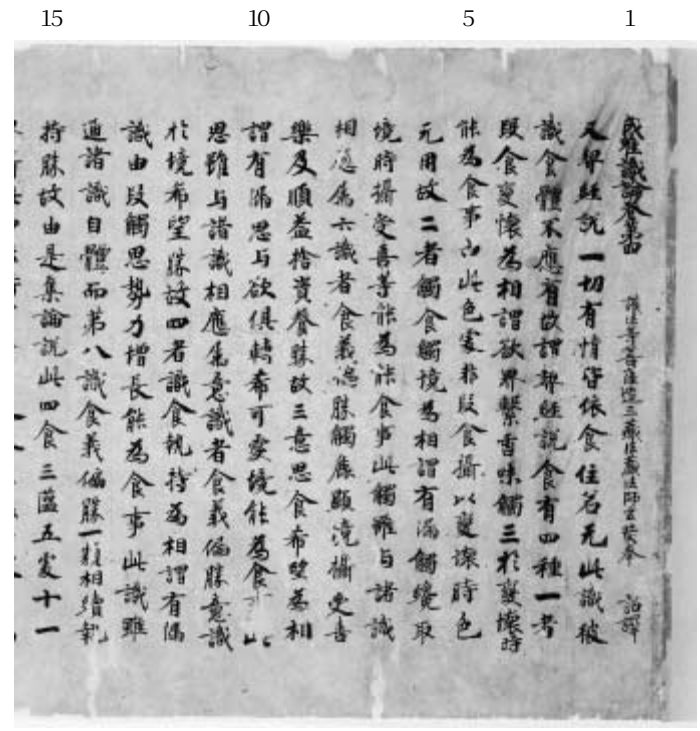
- 2紙4行目 「斗為食」は「互為食」の異体字、石山寺本は「互為食」
12行目 「不離濡根」は「不離煨根」の異体字、石山寺本は「不離煨根」
21行目 「如寿燭等」は「如寿煨等」の異体字、また燭は煨の異体
27行目 「如何得生」は「如何得生」の異体字、石山寺本は「如何得生」
4紙1行目 「厭患心所」は「厭患心所」の異体字、石山寺本も「厭患心所」
23行目 「三種煩惱」は「三種煩惱」の異体字、石山寺本も「三種煩惱」
5紙2行目 「若諸業果无因」は「若諸業果無因」の異体字、石山寺本は「若諸業果無因」
9紙35行目 「阿頼邪」は「阿頼耶」の異体字、石山寺本は「阿頼耶」
10紙8行目 「後開道」は「後開導」と通用
14紙1行目 「脩所」は「修所」の異体字
16紙2行目 「亡念及邪簡」は「亡念及邪簡」の異体字、石山寺本は「亡念及邪簡」
3行目 「心必流湯」は「心必流蕩」と通用
13行目 「耶欲」は「邪欲」の異体字、石山寺本は「邪欲」

第2表 誤字一覧

- 1紙4行目 「変懷」は「変壞」の誤り。
2紙19行目 「説与想等」は「識與想等」の誤り。
25行目 「還不生」は「不還生」の誤り。
3紙22行目 「不想離」は「不相離」の誤り。
4紙3行目 「俱説」は「但説」の誤り。
6紙7行目 「卅卅」は「煩惱」の誤り。石山寺本も「煩惱」。なお5紙3行目の「卅卅」は「涅槃」。石山寺本も「涅槃」とする。
27行目 「俱名意」は「但名意」の誤り。
33行目 「顯亦此識恒依彼識」は「顯示此識恒依彼識」の誤り。
34行目 「所心」は「諸心」の誤り。
7紙11行目 「種子自顯」は「種子自類」の誤り、石山寺本は「種子自類」
13行目 「来蘆」は「束蘆」の誤り。
8紙23行目 「眼等」は「眼根等」の誤り、石山寺本も「眼根等」
9紙8行目 「能重異熟」は「能薰異熟」の誤り。
16行目 「初薰習依」は「初薰習位」の誤り。
25行目 「五識但有」は「五識俱有」の誤り。
30行目 「俱取境眼了」は「俱取境明了」の誤り。
31行目 「准説依第七者」は「唯説依第七者」の誤り。
10紙26行目 「勢地獄」は「熱地獄」の誤り。
11紙3行目 「既爾時必」は「既爾必」の誤り。
4行目 「随用何説」は「随用何識」の誤り。
15行目 「若客斗作等无間縁」は「若容互作等无間縁」の誤り。

左及び下に掲出の写真は聖語藏本『成唯識論』卷四の
卷首(第1紙第1行から15行)と巻末(第16紙第17行か
ら36行)および巻末紙背墨書である。

(卷首)



(巻末)

(巻末紙背墨書)

